慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ピグウ原著 厚生経済学 第一分冊 : 小島栄次、高村象平共訳
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.3 (1935. 3) ,p.463(145)- 466(148)
JaLC DOI	10.14991/001.19350301-0145
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350301-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ピグウ原著「厚生經濟學」第一分册

――小島榮次・高村象平共譯――

氣賀健三

本譯書の原著者ピグウ教授は既に周知の如く、現代英國の經濟學界の第一流の大家と目されて居る人物である。英國に於てはアダム・スミス以來の古典學派の思想が、現代に至るまで繼承されて、常に經濟思想界の主潮流を成して居る觀がある。ピグウも亦勿論之を代表する一人であつて、故アルフレッド・マーシャルに依つて近代化されたる古典學派の思想を受繼ぎ、更に之を發展せしめつゝある所の最も尊敬すべき後繼者である。マーシャルの名に依つて代表せられる所謂る折衷學派の理論は我がピグウ教授の精密な實證的研究を附加せられて一層重味を加へるに至つたといつてよい。「厚生經濟學」一卷は數多きピグウの著作の中に於て最も努力の注がれた代表作の一つであつて、其豐富なる實際的知識と精確なる推理力とは同書中に於て遺憾なく發揮せられて居る。

此書は千九百二十年に初版を上梓して以來好評嘖々たるものあり、版を重ねる事爾來四回に餘り、專門的學理を取扱へる學術書としては遙に水準を卓越せる名著たるの實を失はぬ。マーシャルが確立せる基礎の上に立つた現代

英國經濟思想を知る爲には何人と雖も是非一讀を要する緊要書であつて、我國に於ても其聲價は夙に認識せられて居つた。

然るに今回本書が本塾教授野村兼太郎氏監修の下に、小島榮次、高村象平、小高泰雄及び小池基之四氏の責任ある努力に依つて、邦語に飜譯せられるに至つたことは、經濟學研究に興味を有する多數の人々に取つて實に有難い仕合せであつて、我學界多年の宿望の一つが實現せられた譯である。元來ピグウの著書は衒學的と言つてもよい程緻密を極めて居り、通讀の甚だ困難なものであることが既に定評と爲つて居る。從つて其邦譯が今日刊行さるゝに至つたことは經濟學研究の上から言つて頗る有意義なことであつて、同好學者一同の頗る欣快とする所に相違ない。譯者の說明に依れば全四編八三五頁の中、第一編だけを第一分冊として上梓し第二、三、四編及び附錄は引續き第二、三、四分冊の形を以て刊行される豫定であるといふことである。其譯出の態度が意譯よりも寧ろ逐字譯を主としたものであることは、何れの方面に於ても科學的正確さの要求せらるゝ今日に於ては時宜に適せる方法といふべきであらう。吾人は茲に本飜譯に關係せる諸氏の費せる並々ならぬ努力に感謝すると共に、一時も早く續卷の刊行されんことを希望して止まぬものである。

本書の內容は夙に幾多の諸家に依つて紹介せられた所であるが、筆の序に未知の讀者の爲に略說する。

此書は其表題に依つて察知せられる如く、所謂る一般經濟學原理とは其對象を異にする。即ち、後者は通例單に經濟現象を分析說明することを以て滿足するものであるが、本書は國民の經濟的厚生又は福祉なるものが如何なる場合に其大さに變化を受けるかを研究し、以て國民の經濟的福祉增加の手段に資せんことを目的とせるものある。で元來英國の經濟學說は古典學派の昔より常に現實的な經濟政策的關心に依つて指導され勝ちな傾向がある。而して本書は其特徵を明白に發揮せるもので、其主意は飽くまで「社會的改善に於ける實際的結果に導くやうにとの希望」（譯書三頁）を實現せんとするものである。ピグウはコントの次の樣な言葉を引用して其眞意を明示して居る、「吾々の問題を暗示するのは情の任務であり、それ等を解決するのは知の任務である。……知が第一に適當せる唯一の地位は、社會的同情心の僕婢たることである。」（同三頁）と。

第一編に於ては、或社會の經濟的福祉が大體に於て(一)國民配分額の平均量が大ければ大い程、(二)國民配分額中、貧者へ歸屬する平均取得分が大ければ大い程、又(三)國民配分額の年々の量及び貧者へ歸屬する年々の取得分が變動すること少ければ少い程、益〻大くなるらしいといふことが主張される。第二、三、四の各編は國民配分額の平均量に影響を及す所の主要勢力を研究せるもので、第二編は各種要途への一般資源の分配と國民配分額との關係を論じ、第三編は特に勞働と國民配分額との關係を取扱ひ、第四編は國民の諸階級への國民配分額の分配率如何が配分額に及す影響を研究する。

是に由つて明なる如く、第一編は全卷の總論に相當するものであつて後の三編は之に對して各論たる地位に在るといつてよい。

第一編即ち本譯書に於て最も吾人の興味を惹くものはピグウが如何に「經濟的福祉」を解釋して居るかといふことである。彼は福祉一般に就ては詳細な定義を加へず、獨斷的に福祉とは有形物で無く「意識の諸狀態及び恐らくはそれ等の諸關係である」といふことゝそれは「大小の範疇の下に置かれ得る」（同、一一頁）といふに止めて居る。而してピグウの研究範圍は此福祉の全部に及ぶもので無く、其中「直接間接に貨幣尺度を以て測定し得る部分即ち經濟的福祉に限定される。併し彼は此經濟的福祉と非經濟的福祉との間に明確なる區劃線を設け得ざる事實を承認

し、貨幣標準に依つて大體の輪廓を定めることを以て甘んじて居る。

經濟的福祉の增減はピグウに依れば傳來の國民的配分額の增減、分配又は變動に依つて左右せられるといふ國民的配分額の意義に就ても亦ピグウは明確なる論理的定義を下すことを躊躇し、常識的見解と妥協し、貨幣所得を以て購入する一切の物と自身の所有する家屋に居住することから受くる奉仕を包含するものとして解するを最も便宜的であると爲して居る。

經濟的福祉の國民配分額との關係の中最も重要なる命題は二つある。其一つは貧者に歸屬する配分額が減少しないとすれば、社會の總國民配分額の增加は、それが人々の望む以上の勞働の强制から生ずるのでなければ經濟的福祉の增加を伴ふといふこと、其二は國民配分額が富者から貧者に移讓されるならば經濟的福祉は增加するに相違ないといふことである。此等に關するピグウの說明は微に入り細を穿ち實に吾人を驚嘆せしむるものがある。

以上が頗る簡略せる第二編の要點である。之を要するにピグウは經濟的福祉に影響する諸事情を究明して以て一般經濟政策に經濟原理を役立たせやうと努力したのである。抑〻經濟政策と經濟原理との關係は經濟學の歷史的成熟と共に激烈な論議の對象と成り來たつたものであつて、論理上の問題としても將た又現實上の問題としても未だ解決せられたとは云ひ難い狀態にあるのである。此間に在つてピグウの此著書は周到なる用意の下に、該博なる知識と透徹せる推理の力を以て吾人の進むべき一方向を指示せる羅針盤である。（菊判一五一頁高原書店發行）

協同組合に關する二書

――近藤康男著「協同組合原論」並びに高橋龜吉著「日本農業統制と產業組合」――

小池基之

一

協同組合運動は、近年我國に於ても著しく進展し、恒久的な農村振興を目標として提唱せられた「農村經濟更生計畫」が、農民の自主的經濟機關による農村經濟の統制、その獨立の確保をその根幹とするといふ立場から、漁業組合、森林組合、特に產業組合に對して更生計畫の實行機關としての重要な役割が與へられ、從つて產業組合擴充五ケ年計畫を通じて、販賣・購買事業へ進展すると共に、中小商工業者の對抗が所謂反產運動として激化し、政治問題たらんとするに迄至つた。即ち產業組合は農業政策の具體化の機關に變質すると共に、かゝる產業組合基調への農業政策の趨向は產業組合＝協同組合運動の性質を理解し、その能力と能力の限界の正しい評價を必要ならしめる。「產業組合全書」の刊行は正にかゝる要求に應じたものであり、前揭二書は各その第一卷、第十一卷に當るものである。